2018年10月7日

福音書からのメッセージ

従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。
（マルコによる福音書10章9節）

今日の箇所には、ファリサイ派の人が出てきます。ファリサイ派は、一言で言うと真面目な人たちです。ユダヤ人に与えられた律法を真面目に解釈し、正しいこととそうでないことを明確にしていきました。そして自分たちは、その「正しさ」の中で生きていこうとします。さらに周りの人にも、その「正しさ」に入ることを求めていくのです。

彼らの周りには、その枠の中に入れない人もいました。彼らはその人たちのことを「罪びと」と呼びました。彼らは罪によって汚れている。だから自分たちはその人たちとは絶対に交わりません。自分まで汚れてしまったら大変だから。

それに対し、イエス様は平気で病人に触れ、徴税人を弟子にし、罪びとと一緒にご飯を食べました。だからファリサイ派の人にとっては、イエス様は罪びとの一人だったのです。だからイエス様を試み、その化けの皮を剥ごうとするのです。

今日の箇所では、離縁状に対する問答が繰り広げられます。ファリサイ派は「離縁をすることは法的にOKか、否か」と聞いて来ました。しかしここで、そもそもなぜ離縁状が必要だったのかを考える必要があります。

当時の社会は、男性中心でした。離縁状を出すのも男性から。妻が浮気をしたということだったらまだしも、子どもが出来ないから、他の女性の方がきれいだから、料理をいつも焦がすから、そんな理由で男性は妻を追い出していました。追い出された妻は、生きていくすべがありません。女性が一人で生活できる世の中ではありませ

んでした。また新しい夫を探そうにも、「重婚」のだとみなされていたのです。そこで「離縁状」を渡すようになったのです。つまり離縁状は、女性を守るためのものでした。ファリサイ派の頭には、その大事な部分が抜け落ちていました。

イエス様は、そもそも結婚とは何だったのかを語ります。神さまはわたしたちを男と女に創造され、お互いを助ける者として結び合わせてくださった、それが結婚です。しかし「神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない」と命じられた言葉を聞くときに、胸が苦しくなるのはわたしだけでしょうか。

親しい人の中で、そしてわたしたちの中で、神さまが結び合わせたものを引き裂いてしまったことはありませんか。離縁状を出さなかったとしても、わたしたちは何度も、連れ合いを悲しませ、いらだたせ、見下し、苦しめてきました。何度もわたしたちは、引き裂いているのです。イエス様の目から見たら、わたしたちは何度も離縁状を出している、そんな一人一人なのかもしれません。

神さまの視点に立ったときに、わたしたちは自分たちの弱さに、罪深さに気づかされます。だからこそ、神さまはイエス様を遣わされたのです。その弱さを知ってはじめて、神さまにすがり、すべてを委ねて生きていくことができるのです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/